



以後、満州族の子弟が多くを占めているこれらの留学生はどうなったのかという情報については、今回北京市檔案館で見つけた、教育部から京師第一中学校（1912年に八旗高等学堂から名称を変更）宛ての文書から、これらの留学生が派遣元に生活支援を求め、官費を続けて支給してほしい旨の内容が読み取れる。

報告者が北京市東城区宝釵胡同にある北京一中を訪問した日は授業中だったが、幸いそのまま中に入ることができた（写真5）。北京一中の正門から入って、すぐ左側に下記の写真のような碑亭が建てられている（写真6）。碑亭の上に「北京一中碑亭記」という横書きの看板が掲げられ

ている。この「碑亭記」の文字によって北京一中の沿革が簡単ながら分かる（写真7）。碑亭の真ん中に立ててある石碑に刻まれた当時の文字をじっくり見れば、光緒20（1894）年に八旗官学から八旗書院に変更した経緯についての説明であることが判別できる（写真8）。

今回の調査期間は16日間で、元旦から3日間の休みや公共施設の休館日を除くと、実際に調査できる時間をもっと短くなったが、このように限られた日程を効率よく利用して、陸軍貴胄学堂の旧跡、八旗学堂の旧跡、北



写真 5



写真 6



写真 7

京市檔案館、中国第一歴史檔案館、中国国家図書館、北京師範大学図書館などを回って、写真を撮り、関連史料をいくつか入手するなど、有意義な研究調査ができたと思う。そして、北京滞在中に、北京師範大学の万建中先生に温かく歓迎され、わたくしの研究内容と滞在予定の説明を丁寧に聞いていただき、適切なアドバイスをしていただいたことは、非常にありがたいことであった。今後は、貴胄留学生と八旗留学生の子孫を対象に聞き取り調査を行い、当時の留学生らの生活状況を検討するために、より豊富な資料を活用したい。



写真 8

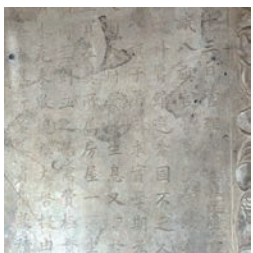


写真 9

【注】

- (1) 外務部「奏陳尊議出洋学生章程折」、陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編・留学教育』、上海教育出版社、1991年、16頁。
- (2) 前掲書、32頁。
- (3) 董守義『清代留学運動史』、遼寧人民出版社、1985年、370頁。
- (4) 「貴胄學員之留学額」、『大公報』、1909年7月20日。
- (5) 写真1は、『北京近代建築史』（張復合著、清華大學出版社、2004年）に見られる。ここで使っている写真1・2は、「百年回望之八十四陸軍貴胄学堂」という文章（http://blog.sina.com.cn/s/blog_56577d8f0100vavz.html）中の写真を利用した。

「献上された」海と「奪われた」海

—韓国蔚山広域市北区江東洞板只のワカメ漁場に関する歴史と語りから—

新垣 夢乃

（歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）



「おばあさんは、『奪われた』というように話をする」。

これは、韓国蔚山広域市北区江東洞に属する板只（판지、판지）という村落でワカメ漁場の歴史についてお話を伺った際に出てきた言葉である。この板只の人々が利用してきたワカメ漁場には、複雑な歴史的経緯がある。本小稿では、板只のワカメ漁場を巡る歴史的経緯を紹介し、その歴史が現在どのように認識されているのかを紹介してみたいと思う。

板只のワカメ

板只は、2015年1月時点で58人の人口を有し、そ

のうち15人が板只漁村契に所属し漁業を営んでいる。板只ではアワビ、ウニ、サザエ、ナマコ、ワカメなどを対象とした漁が行われている。これらの漁は、海女（ヘニョ、해녀）が行う。そのうちワカメは、高麗王朝時代から王に献上されていたとされ、現在でも質の高いものであるとして地元では語られている。

ワカメ漁場の「歴史」

板只のワカメ漁場には、その権利を巡って複雑な歴史的経緯が存在する。板只に建てられたワカメ漁場に関する碑文によると、板只のワカメ漁場は、高麗王朝建国

(918 年) の際に功績のあった朴允雄（蔚山朴氏の祖）という人物にあたえられたという。それが、李氏朝鮮時代の 1751 年には、漁場が当時の王族に支給され、国有の漁場となった。だが、国有化後、ワカメが 3 年連続で不漁になり、



当時の板只の漁民たちは不漁の原因がワカメ漁場を取り上げられた歴代の蔚山朴氏の怒りにありとし、漁場を蔚山朴氏に還すようにと行政側に訴えた。それが認められ漁場は蔚山朴氏に返還された。そのため、板只のワカメ漁場は「両班岩（양반마위 貴族の岩の意）」と呼ばれるようになった。そのような経緯から、毎年行われる蔚山朴氏の祖先を祭る行事の際には、板只からワカメを蔚山朴氏宗中に献納してきた。

この慣行は、日本植民地期にも存在した。だが 1950 年に実施された農地改革法に伴い、板只のワカメ漁場は、蔚山朴氏の私有から国有となった。そして、1961 年「5.16 革命」後の漁業法改正により、板只のワカメ漁場は、板只の漁村契に帰属する漁場となる。

しかし、蔚山朴氏から当時の朴正熙大統領に対して漁場の返還を求める動きがあり、1965 年には朴正熙が漁場を蔚山朴氏へ返還するようにとの命令があったという。

そのような経緯から、蔚山朴氏は、1970 年 8 月に板只の海岸に土地を購入し、そこに板只のワカメ漁場の歴史的経緯を記した碑を建立した。そして、2001 年 12 月 20 日には、板只のワカメ漁場とその歴史が蔚山広域市の文化財第 38 号として指定された。そして現在でも、板只から蔚山朴氏へワカメを献納しているという。

板只のワカメ漁場には、上述のような歴史的経緯が存在した。それは碑に記され、蔚山広域市の文化財ともなっている。それは、いわば板只のワカメ漁場についての公式の「歴史」となっているといえる。



「奪われた」海という歴史

だが、現在の板只の人々は、上述のいわば『献上された』海」ともいうような内容とは異なるニュアンスのワカメ漁場に関する歴史的経緯を、母親や祖母の世代から聞いて育ったという。それが冒頭で述べた言葉である。それは、板只の人々がワカメ漁場を両班（ヤンバン）の人々へ還して欲しいと自ら願い出たというのではなく、漁場は「奪われた」というニュアンスで語られてきたという。

だが、一方で板只の人々は、板只のワカメ漁場で採れるワカメがかつて王に認められた品質である事を誇らしく語る。そこでも、ワカメ漁場に関する歴史が利用されるのである。

「献上された」海」というような状況がどのような状況であったのかを実感を持って理解する事は難しい。しかし、この権力者間での漁場の帰属を巡る経緯は前近代の話ではなく、現代まで続いて行われてきたというのである。もちろん、この蔚山朴氏と蔚山広域市によって記されたいわば板只のワカメ漁場に関する公式の「歴史」は、きちんと資料などによって実証する必要がある。それによって、公式の「歴史」と板只で語られてきた歴史とのズレを検証していくことができるようになるだろう。だが、それだけではなく、板只の人々がワカメ漁場に関する「歴史」と自らのなかで語られてきた歴史とのズレをどう解釈し、そこでどのような実践がなされてきたのかを知る事は、より重要な課題であると考ええる。それを知る事から板只の人々の海を自らの生活場としていく手法、つまり板只の人々の海を自らのものとしていく際の生きられた感覚のあり方を知ることにつながるのではないかと考えさせられた。



謝意

小稿は、2015 年 1 月 13 日から 26 日の間に、韓国で板只漁業契および漢陽大学校東アジア文化研究所の方々のご助力により見聞きできたことをまとめたものです。皆さまのお力添えのおかげで、大変貴重な経験をすることができました。文末ながら、皆さまに謝意を示したいと思います。ありがとうございました。